
弟とあたしの攻防戦

富樫 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟とあたしの攻防戦

【Nコード】

N6487S

【作者名】

富樫 聖

【あらすじ】

いきなり美形完璧弟に押し倒されたあたし。近親相姦はマズイだろう！？ え？ 実は姉弟じゃない？ いやいや、精神的には——
つて、人の話を聞け！ —— 弟の求愛から逃れようとする姉と、姉を手に入れようと迫る弟の話。中篇予定です。亀更新になりそう……。

弟とあたし

あたしの弟の明良^{あきひ}は美形だ。

嫌味かと思うほどカッコイイ。

茶色のさらつとしたやや長めの髪に、切れ長の目。すらりと通った鼻筋。長い睫毛。

官能的に笑みを刻む口元。その口から出る声は甘く腰に来る声で、何故か姉のあたしもドキドキさせられるほどだ。

細くもなく太くもない体型で背も高い。

お頭^{つむ}の方も大変よろしく、学年一位の成績を外したのなんて見たことがない。

これまた運動神経も良くて、高校一年の時は毎日のように運動部の連中からスカウトされていた。

これで性格が悪かったらバランスが取れていたと密かに思うあたしだけど、ヤツは性格も良い。

こんな普通で平凡なキャラである姉のあたしも「姉さん」っていつて懐いてくれる。

夜に突然アイスが食べたくなつたあたしが「コンビニに行つてアイス買つて来て」って頼んだら二つ返事で行ってくれるくらいに出来た弟だ。

頭も顔も運動神経も、おまけに性格も良いなんて——ここまでくると、もはやチートキャラ。

時々あまりに出来すぎて、人間かと疑ってしまうのはあたしが捻くれているのかもしれない。

そんな万能王子様の弟は——当然モテる
非公式なファンクラブまであるらしいくらいにモテる。

対するあたしは——明良と姉弟と思えないくらい平凡だ。

一応、容姿は中の上くらいだと思ってるんだけど、男の子にモテたためしはないから自己評価が高すぎるのかもしれない。

成績も中の上。

運動神経も中の上。

判で押したように『中の上』——つまり普通に毛が生えた程度のものでしか持てない女。

それが藤崎葵^{ふじさきあおい}——あたしだ。

こうあまりに弟と差があると、もはや嫉妬心も浮かばない。

物語によくあるじゃない。優秀な兄弟に劣等感を持つていうのが。

でもあまりに違いすぎると格がもはや別次元というか、同じ土俵じゃないというか。

とにかくそんな感じになると羨望の念はあっても嫉妬にまで行かないのだね、人間って。

おかげで姉弟の仲はすこぶる良好。

普通は年子だと喧嘩することが多いハズだけど、あたしたちに限って言えばめったに言い争うことはない。

言い争ってもたいてい明良が折れてくれるんだから、本当、姉に對しても性格良くてどうするんだろうと思う。

そんなんでこの世の中学生残っていきえるのかとか。

悪い女にあつさり引つかかってしまうんじゃないとか。

おねーちゃんとしてはすごく心配になるわけですよ。

自慢の弟だから変な女に引つかかって欲しくないのだ。

男の前ではやたらと良い子ぶってて、同性の前では本性丸出しの二面性を持つ女の子とか。

可愛い年下を籠絡しようとするお姉さま方とか。

そーいうのはパス！ まったくもってパス！

姉の権限を持って全力で阻止することを誓う！

明良には最高の彼女を作ってもらいたい。

頭が良くて顔が可愛くて、性格もよくて礼儀正しい子。

まあ、実際そういう子が家に遊びにきちゃったら、それはそれで嫉妬しちゃうだろうけど……自分と比べて。

そう。

ここまで言えばお分かりだろう。

あたしは立派なブラコンだ。

だ、だって仕方なくない！？

顔良し、頭良し、器量良しの弟だよ？

甘やかしてくれる弟だよ？

——これでブラコンにならない女はいないって！ 絶対！

明良も明良で多少はシスコンの気があると思う。

だって友達と約束してても必ず私を優先にしてくれるし。

明良の親友の藤原礼司君——イケメン眼鏡君だ——だって、以前うちに遊びに来たとき『明良はシスコンですからね』などと言ってたし。

ちなみに藤原君の台詞は私がこっそりトイレに降りてきた彼を捕まえて『明良って好きな人いるの？』と聞いた時の返事。

明良が女の子の告白を断る時に『俺好きな人いるから』って言うてるらしいのを噂で聞いて気になったのだ。

そんなの明良本人に聞けばいいじゃないかと思われるが、好きな人がいてそれが誰かなんて、普通姉には言わないでしょう？

だから、手っ取り早くお友達に聞いたのである。

そこで知ったのが、明良もシスコンの気があると認知されている

って事実だ。

あたしのブラコン、一方通行じゃないらしい。
ブラコンでシスコンなんて、ある意味両思いじゃない？

——なんて、明良に好きな人は居なさそうなのでホツとしつつの
んきに思っていたあたし。

確かにブラコンでシスコンでお互い様かもしれない。
だけど。

だけどね、あたしと明良は姉弟。

依存はしているかもしれないけど、れっきとした姉弟愛。
恋愛感情ではない——はずなんだけど。

あ、あたし、どうして今、明良にベッドに押し倒されているんで
しょうか——？

弟とあたし（後書き）

新連載始めてしまいました。

弟の誕生日

あたしは明良に自分のベッドに縫い付けられながら、どうしてこんな事態になったのかを反芻した。

明良の18歳の誕生日の前日の夜。

来週頭に提出する予定の授業のレポートをPCで作成していたあたし。

ようやく完成して、推敲は明日でいいやとノートパソコンの電源を落とした時だった。

——明良があたしの部屋にやってきたのは。

「姉さん、起きてる？」

控えめなノックの後に続く明良の声。

「起きてるよ」

答えながらあたしはノートパソコンの蓋を閉め、椅子に座ったまま入り口の方をくるっと振り返った。

扉を開けてあたしの部屋に入ってくる明良。

パジャマ代わりに使っている黒のスウェットスーツ姿だった。

いつ見ても美形な我が弟。何を着てもカッコイイ。

そのスウェットだって上下セットで千円の激安価格な安物なのに、明良マジックでもっと高級なもののように見えてしまうのは、決して姉の欲目というわけじゃないだろう。

いつもいつも美形の弟を見ているから、あたしには彼氏ができないんだ。

あたしの部屋を横切って近づいてくる明良を見ながら不意にそんなことを思う。

ミスターパーフェクトな弟を持ったおかげで、自分のことは棚にあげてすっかり男の理想が高くなったあたし。

好きなタイプと聞かれて『明良みたいな人』と言っていたらそりゃ、彼氏もできないわな。

だって、明良みたいな人なんてそこら辺にいないもの。

おかげ様で大学一年生にもなつて彼氏いない暦〃年齢。

これはマズイのではないかとさすがに危機感を覚えて明良の反対を押し切つては合コンに参加してるんだけど、男はみんな芋に見えるから彼氏獲得の道は遠い。

……もしかしたらずっと出来ないかもしれない。明良と離れない限り。

「どうしたの？ こんな夜中に」

あたしは首をかしげながら尋ねた。

大学生のあたしは授業開始の時間が遅い。だけど一歳違いの明良はまだ高校生で、朝からばっちり授業があるはずだった。だからとつくに就寝しているものと思っていたのに。

そんなあたしに明良はにっこり笑う。

——後から考えるとこの笑顔は曲者だったと思う。

子供の頃、近所の悪ガキにスカートめくられて、ベソベソ泣いていたあたしに『仕返ししてあげるから。僕にまかせて』と言った時

に明良が見せた笑顔とそっくり同じだったのだから。

あれ以降、なぜか悪ガキはあたしを思いっきり避けて接触してく
ることはなく。それどころか明良の姿を見るだけで顔を青くして逃
げ出す始末だった。

何したんだろう、と子供心に思ったあたしだったけど『嫌いな男
の子が寄ってこないのだから、まあいいか』と事なかれの考えで
深く考えることはしなかった。

もつと変だと思っていたら、そして追求していたら、この事態は
避けられたかもしれない。

……いや、明良のことだから避けられない可能性の方が高かった
だろうけど。

だけど全ては後の祭りだ。

「明日、いや、もう今日か、俺18歳になったよ、姉さん」
にっこりと笑顔のまま明良は言う。

その言葉に、あたしはハッとして時計を見た。

12時を回り、確かに日付がもう変わっている。

「本当だ。もう今日なんだね。明良、誕生日おめでとう！」

「ありがとう姉さん。ところで誕生日のプレゼントのことだけど…」

…」

「あ、買ってあるよ！」

あたしは顔を輝かせると一週間前から用意していた皮のパスケー
スを机の引き出しの中から取り出した。

明良が今使っているのは二年前にあたしが誕生日に買ってあげた
もの。だいぶ古くなってボロボロになりかけているのを知ってたか
ら、今年のプレゼントはパスケースにしたのだ。

「今年はパスケースなの！」

喜んでくれると信じて疑わないあたしは、綺麗に包装されたそれを明良の前に差し出した。

案の定、明良は嬉しそうに笑って受け取る。

「ありがとう姉さん。大切にするよ。……でも実はもう一つ欲しいものがあるんだけど……姉さん、くれる？」

微笑ながら小さく首をかしげてあたしを伺うように見つめる明良。それがご飯を目の前に“食べていい？”と強請っているワンコみたいに見えて、あたしはキューンとした。

実はこの顔に弱いのだ。

普段めつたに自分から何かを強請ったりしない明良だけに、たまにこういうレアな表情されると叶えてあげたいと思ってしまう。

「いいよ！ 今月はお母さんから多めにお小遣い貰って余裕があるから、奮発しちゃうぞ」

誕生日プレゼントが買いたいとお母さんに言ったら、いつもより多い金額のお金をくれたのだ。

明良が反対したからアルバイトもできずにいたので、お小遣いの増量ははつきり言っただけだった。

「ありがとう姉さん」

明良はまたにっこり。

「でも、お金で買うものじゃないんだけど」

「？ お金で買うものじゃないの？」

「そう。姉さんが持っているもの。それが欲しいんだけど……俺にくれる？」

あたしが持っているもの？

内心首をかしげた。

あたしが持っていて明良が欲しがるものなんてあったらどうかと。

自分で作ったプログラムを売っている明良は小金持ちだ。PCだってあたしが持っているものよりも遥かに高性能のものを使ってる。だからあたしが持つて明良が持つてないものなんて、強請るほど欲しがるものなんて、全然思い浮かばなかった。

だけど、かわいい弟が欲しいと言ってるなら、何だか分からないけどあげようじゃないか！

そう思ったあたしは頷いた。

「いいよ。何だか分からないけど、欲しいものがあつたら譲つてあげる」

「ありがとう、姉さん。嬉しいよ」

そう言つた明良は本当に嬉しそつだった。

ほんのり紅潮した顔は男のくせに色気があつて、ドキドキするやら負けた気分になるやら、だ。

明良は嬉しそつに笑つたまま言つた。

「じゃ、姉さん、ちよつと立ち上がった」

「へ？」

「……なぜ？」

目をパチパチさせながらも、あたしはパソコンデスクの椅子から立ち上がった。

「ありがとう」

そつ言つと明良はあたしから受け取つたプレゼントを机の上にそつと置き、目の前に立つた。

明良の背はあたしより頭一つ分も高い。

中学に入った時からよきによき延びてあつという間に追い抜かされてしまった。

150をちょっと越えた止まりのチビのあたしと180センチ近い明良とではその差は歴然だ。目の前に立たれたら、見上げるしかない。

「明良の欲しいものって、何……？」

あたしは明良を見上げながら、首をかしげた。

明良に何かあげるのに、立ち上がる必要があるのだろうかと思つて。

あたしのその言葉に明良はクスツと笑った。

——艶やかなその笑みに、なぜか胸が騒ぐ。

「欲しいものは——。まずはこれ」

明良は言うなり、あたしの肩を掴んで自分に引き寄せた。と同時にかがみこんで、ビックリするあたしに顔を寄せてくる。

——え？

迫る明良の顔。

何が起こったのか全く分からなかった。

分かったのは明良の長い前髪があたしの額に掛かってきたことだけ。

そして、明良の笑みの形を描く唇があたしに——。

——はい？

何か唇に温かいものが触れて、あたしの思考は停止した。

弟の誕生日（後書き）

なかなか先に進まなくてすいません……。

弟に押し倒されたあたし（前書き）

R 1 5 ?

弟に押し倒されたあたし

こ、この唇に感じる柔らかな感触のものはもしかして——？

ようやくまともな思考力を取り戻したのは、それから少し経ってからのことだった。

相変わらず唇は押し付けられたままで。

何度か離れては再び触れ合うのを繰り返していた。

こ、こ、これはもしかして、チッス……じゃなくてキッス？ 接吻？ おフランス語でベーゼ？

いや、言い方はどうでもいい。今問題なのは——弟にキスされているという事実だ。

何であたし、明良にキスされてるわけ——？

しかも、これってあたしのファーストキス！？

いやいや、弟で家族だからノーカウントの方向で！

目を見開いたままパニくってわけのわからないことを考えるあたしをよそに、明良は顔を上げて、

「姉さんのファーストキス頂きました」

なんて言って笑う。

だけどその笑いがやけに艶やかというか、フェロモンたっぷりで

……ぞわぞわと背中に何かが走るのを感じた。

「で、これはセカンドキス」

笑いながら言って、再び顔を寄せてくる明良。

その間、あたしは状況についていけずにポカーンとするのみ。

そんなあたしの口に再び押し付けられる柔らかで温かい感触。

だけど、今度のは前のファーストキスの時とは違っていた。

あたしの唇を割って何かが口の中に侵入してくる。

温かくて湿っていて、ざらざらしているもの。

ソレがあたしの口の中を動き回る。歯列をなぞり、付け根を扱き

——そしてあたしの舌と絡みあう。

「……………んっ……………」

唾液を嚙られ、そして流し込まれて——口の端から垂れたその冷たい濡れた感触に我に帰るあたし。

こここれはいわゆるディープキスってやつなのでは……………？

せ、セカンドキスがベロチューって、しかも弟と！？

だめだ。あたしの頭の許容量を超えた事態が起こっている模様。

とにかく今やるべきことはこのキスを止めることだ。

だって姉弟でこんなキスはどう考えてもスキシップを遥かに飛び越えてヤバイ域に入ってるだろ！

あたしは明良の肩を叩いて“離せ”とアピール。

だけど、当然気付いているだろうに一向にあたしを離す気配はない。

無視か。スルーか！

こうなったら自力で……………って、それも無理のようだ。

頭を振れば外れるかと思ったのだけど、いつの間にやら後頭部をがっちり手で支えられていて動かせませんのですよ。

あたしが必死こいてもがいている間も、もちろん口の中をまさぐられ続けていた。

「んんっ、んんっ」

そのうちにどういいうわけか力が抜けてきて、もともとうまく働いていなかった思考はさらにうすぼんやりとしてくる。

離れるとアピールするはずの手は、どういいうわけか明良の肩にすがるように置かれていて。

今この様子を誰かに見られたら、ほとんど同意でキスしているように見えただろう。

やがてようやく明良が顔を上げたときには、あたしは息も絶え絶え——口を塞がれていたので途中で鼻呼吸に切り替えたけど、絶対に酸素は不足している模様——で、立ってるのがやっとの有様だった。

そんなあたしに明良は笑う。例の艶やかな笑いを。

「セカンドキスもご馳走様。だけど、これ、単なる前菜だからね。メインはこっち」

視界がぐるんと動いた。

と思ったら、背中にボスンという柔らかな衝撃が走って——気付いたらベッドに倒れていた。

だけど、ベッドに倒れたのはあたし一人じゃなくて——明良も一緒で。

なぜか彼はあたしの身体の上において——。

重みでギシッとベッドが軋む。

なあんであたしはベッドにいるの？

どうして明良はあたしの手をベッドに押さえつけているの？

……どうもディープキスかまされて、思考が鈍っているらしい。
普通ならベッドに押し倒された時点で明良の意図に気付いただろうけど、この時のあたしはどうしてこんな体勢でいるのかさっぱり理解できなかった。

「あ、あの、明良、重いよ？」

「うん、俺の体重がかかってるからね」

おバカなあたしはこの時、バランスを崩したかなんかで明良と一緒にベッドに倒れこんだものと勘違いしていた。

「明良がどいてくれないと、あたし身体起こせないんだけど……」

「姉さんはしばらく起き上がる必要ないよ」

「え？　なんで？」

「こういうことだから」

明良はそう言って、あたしの首筋に顔をうずめた。

明良の髪の毛の感触が首に当たってくすぐったかった。だけど、それよりあたしがびっくりしたのは、湿ったものがあたしの首の付け根に押し当てられたことだった。

その湿ったものは少しずつ移動していつて――。

あたしはそれが明良の舌であることに気付いて仰天した。

それでようやくベッドに縫い付けられていることの意味を理解したのだった。

あ、あたし、明良に押し倒されてるの！？

明らかに意図を持って動いていく唇と舌の感触に戦慄した。

「ああああ、明良くん？ どうしてあたしを押し倒してるのかな？」

ひいひいと心の中で絶叫したあたしは恐る恐る尋ねた。声が裏返ってしまふのは致し方ないことだと思う。

「ん？ もちろん、誕生日プレゼントに姉さんをもらおうと思ってるからだけど？」

明良は顔を上げてにつこりと笑う。

さすがのあたしにも至近距離で見る羽目になったその笑顔が、爽やかとはほど遠いことが分かる。

獲物を前にした肉食獣のような情欲と貪欲さを表したような笑顔だ。

だけど、今問題なのは笑顔ではなく——いや、これも十分問題だけど——明良が言った言葉だろう。

あたしをもらうつて……押し倒されている今現在、思い浮かぶのはアレしかないよね！

——って、それはマズイだろう！ どう考えても！

「ああああ明良君、おねーちゃんは、それは非常にマズイと思うの！」

「何で？」

「おおおい！ キョトンとしてそんな不思議そうな顔しないでプリーズ！」

「常識とか倫理観とか、いろいろ問題あるでしょう！？」
「だから、何で？」

おおおい！ いつの間にわが弟はそんな道德観に欠ける子に育っちゃったの？

「き、近親相姦は世間に顔向けできないと思うの！！」

言いながらあたしは黄昏れた。

よもや近親相姦と叫ぶ事態になろうとは……。

あまりに姉弟仲が良いから、やつかんだ女の子たちに当てこすりで『近親相姦じゃないの？』などと影で言われていたあたし。否定するのもバカらしいんで黙っていたんだけど、よもや官能小説や官能漫画（ＴＬ含む）でしかお目にかからないその単語をこんなところで叫ぶことになるだなんて、世の中どうなるか分らないものね……。

「近親相姦？」

明良は目を見開く。

まるで初めて聞くと言わんばかりの表情だった。

まさか知らないなんてことはないよね？　そこまで純粹君だとは思えないし。

——いや、分らないぞ。

あまりにパーフェクトすぎて高嶺の花状態の明良。

もしかして世俗にあまり汚れずにここまで来ちゃったのかもしれない……。

と、押し倒されている現状とはほど遠いことを考えるあたし。

「やっぱり……」

つぶやいて明良はいきなりあたしの身体の上にガクツと押し掛かった。

明良の全体重があたしにかかって重！ 重！

つ・ぶ・れ・る！

ペチペチと背中を叩いてアピールしていると、なにやら落ち込んだ状態からすぐ浮上したらしい明良は身体を浮かせた。いや、手は相変わらずあたしの手首つかんでベッドに縫い付けてるし、足だって明良のそれが絡んで動けないようにしてるけど！

「おかしいと思ってたんだ。あれだけ意思表示してたのにスルーされまくるだなんて。少しも意識されないだなんて……」

眉を顰めてつぶやく明良。

そんな表情も十分カッコイイけど、言ってること分りませんよ、明良君。

「やっぱりこうなったら身体に分らせるしかないようだ」

「は？」

なにやら不穏なことをつぶやいた明良はあたしを見下ろして真剣な眼差しで言った。

「姉さん、これ近親相姦じゃないから。いや、そのシチュエーションも燃えるけど、これは違うから。幸いなことにね」

「へ？ 姉弟で……にやんにやるのは近親相姦でしょ？」

「これは違う。俺達には当てはまらない。……だって、そもそも俺達姉弟じゃないから」

「……へ？」

——空耳？

「……姉弟じゃない……？」

「そう。もつとも、もし例え姉さんと本当に姉弟だったとしたら近親相姦を犯すのもやぶさかではないけど」

……もしもし、明良君。何かすごいこと言ってますんか？

「だけど、現状、俺達は姉弟じゃないから当てはまらないんだ。よかつたね、姉さん、世間に顔向けできるよ」
につこり。肉食獣な明良の笑み。

——姉弟じゃない？ あたしと、明良が？

「え？ えええええええー？」

あたしの叫びが部屋にこだました。

弟に押し倒されたあたし（後書き）

こんなに近親相姦を連呼していいのだろうか……。
R15ってどこまでOK？

衝撃の事実（前書き）

ちよつと短め

衝撃の事実

「姉弟じゃない？ え？ 冗談？」

あたしは明良に組み敷かれながら混乱したようにつぶやいた。

「冗談なんかじゃないよ。本当の本当に姉弟じゃないんだ。便宜上姉弟になっただけで、俺達は正確にはハトコなんだよ」

再び首筋に唇を落としながら明良が言う。

人の肌に口付けながら喋るから、非常にくすぐったいんですけど。

いや、それより……。

「はどこ？」

はとこはイトコの子供同士のことだ。

つまり、あたしと明良の親がイトコだったこと……？

そこまで考えてあたしはハツとする。

はとこだったことは、あかしが明良のどっちかがお父さんお母さんの子供じゃないってこと！？

がちょーん。

衝撃の事実だ。

そんな風にあたしがショックを受けてるというのに、明良は人の上で実に楽しげに肌に唇を這わせていく。

って、いつの間にか、パジャマの第一ボタンが外されてるんですけどー！？

「こ、こらこらこらこらー！」

人に爆弾落としておいて何をしてるか！

「どういふことなの、はとこつて！」

もがきながら叫んだら、明良が顔を上げた。かなりしぶしぶな感じで。

「説明して！」

「説明も何も、俺は反対に何にも覚えてないで本当の姉弟だと思っていた姉さんにビックリだよ」

「何も覚えてないって……？」

明良ははあとため息をついた。

「もらわれっ子なの、俺。四歳の時に事故で本当の両親が亡くなって、父親の従兄弟である父さんが引き取ってくれたんだよ」

「はあああ!？」

初耳ですよ、明良君！

またまたため息をつく明良。

「あのね、姉さん。俺がこの家に来たのは四歳の時。つまり、物心ついていたしちゃんと覚えてるんだよ？　そして、姉さんは俺より一歳年上——つまり、俺がもらわれた時姉さんは五歳だったわけだ。『今日からあたしがお姉ちゃんよ』って言ったのは姉さんだよ？　なのにどうして覚えてないのさ？」

「ええええええ？」

……ごめん。全く憶えてないデス！

いくら探っても探っても、そんな記憶——しかも自分が一人っ子

だった記憶も皆無なんですけど！

しかし姉弟じゃなかったのか……。

どうりで顔が似てないと思ってたよ。

超絶美形な明良と平凡顔なあたし。

血のつながりを疑ったことはもちろんあるにはあるんだけど、そんなわけないって疑惑の種を握りつぶして事なかれでやってきたツケが回ってきた感じ。

だって、疑問に思っただけで調べれば本当の姉弟じゃないってすぐ分かったわけでしょう？

こんな弟に押し倒される前にさ。

あ、いや、弟じゃなかったつけ。

「って、ボタンを外さないでよ！」

ボケっとしているうちに明良はあたしのパジャマのボタンを次から次へと外し始めた。

それも片手はあたしの両手首をひとくくりにして頭上で押さえつけていて。

もう片方の空いている手で外してるんだよ？

ボタンを片手ですると外すなんて……どこまで器用なの、この弟は。あ、弟じゃなかったつけ。

「たとえ本当の姉弟じゃなくても気持はそうなんだから、やめれ！」

「近親相姦じゃないんだから構わないだろう、姉さん」

「近親じゃなくても相姦はんたい！」

「近親じゃないから、相姦にはならない」

「つい今しがたまで姉弟と思っていたんだから、精神的には近親相姦だあ！　って、話聞け！」

話している間も明良はプチプチとパジャマのボタンを外していき、とうとう最後の一番下のボタンまで外してしまった。

前身ごろを開かれて、タンクトップ姿を明良の視線の下に晒すあたり。

ブラジャーは付けないで寝る派だから、そのタンクトップの下は当然裸だ。

うおおおお、心なしか明良の視線はこんもりと盛り上がったタンクトップの胸の部分に注がれている気がするのだけど！

焦ったあたしは必死になって叫んだ。

「あああ明良だって姉だって思ってたのに、どうしてこういうこと出来るの！？ こんな平凡顔のおねーちゃんではなくて、明良なら引く手あまたじゃないの！ 考え直せ！ 今なら間に合う！」

そう。今なら笑って姉弟に戻れる。

仲の良いブラコン・シスコンの関係をこれからも続けられる。

あたしがとつさにそう思ったのは、おそらく何かが変わることを恐れたから。

本当は知ってしまったらもう元には戻れないことを本能的に感じて、それでも今までの関係にしがみつきたくて。

必死に思ってしまったのだ。戻れると。

今なら間に合うと。

——だけど。

明良はそのあたしの甘い考ごと今まで築いてきて全てを吹き飛ばした。

「姉さん。俺は姉さんを“姉”だなんて思ってたよ？ たとえ姉さんと呼んでいようとね」

その顔に浮かぶのは妖艶な笑み。
その瞳に浮かぶのは、情欲の焰。

「俺にとって姉さんは“女”。俺は……ずっとずっと姉さんが欲しかった。だから——姉さんを頂戴？」

そう言う明良の顔は弟ではなく、一人の“男”のものだった。

衝撃の事実（後書き）

最後がやや微シリアス。

だけど、次回はコメディーの予定。

しかし……ムーン様枠でやった方がいいような内容なのは変わらずです。

弟の欲しいもの（前書き）

R
15?

弟の欲しいもの

ここにきてようやくあたしは明良のコレが冗談なんかではなく、本気も本気なのだということを理解した。

うえええええ、マジっすか!?

「おおお、おねーちゃんを頂戴って何を欲しいんでしょうか!？」

あたしはパニックになって叫んだ。

いえいえいえ、ベッドに押し倒されている以上、何を欲しがっているのかおぼろげながら分る気もするけど、万に一つということもあるでしょう？

決して決して時間稼ぎしているわけではない！

喋ってれば正気に戻ってくれるかな〜とか期待しているわけでも！

「全部欲しい」

だけど明良はそんな私の思惑を吹き飛ばすかのようにあっさり言った。

直球どころじゃなく、デッドボール受けた気分になるようなことを。

「姉さんの身体が欲しい。心が欲しい。未来が欲しい。——つまり、丸ごと欲しいんだ」

人間を丸ごとなんて、誕生日プレゼントにしては大きすぎないでしょうか、明良君。

——って、そうじゃなくって！

「お、おねーちゃんを丸ごと頂いても肥えてないから美味しくないですよ！ み、未経験だし！ あ、明良満足できないよ、きつと！」

ああ、あたしは一体何を言ってるんだろうか。未経験だの明良の前で叫んだりして。

姉弟の間でその手の話が持ち上がったことないのに。相当自分でもテンパっているのが分る。

だけど――。

「満足どころか……もし姉さんが未経験じゃなければ、俺は暴れるよ?」

「――は?」

うつすら恐い笑顔を浮かべながら言う明良に、あたしは彼の下で硬直した。

「もし万が一姉さんが初めてじゃなかったりしたら――俺はそいつを見つけ出してこの世から抹殺するよ?」

ヒイイイ!　なんか恐いこと言ってますよ、明良君!

キャラ違くありませんか!?

いつもは爽やか王子様キャラなのに!

あたしは慌てて硬直状態から抜けると首をブンブン横に振った。

「み、未経験!　あたしバージンだから!」

抹殺とか……明良ならできちゃいそうで、恐い!

だってチート君だもん!

いつもの明良ならそんなことはしないって断言できたけど、この明良なら平気でやる気がする。

今の彼は……そう、美形悪役キャラのようだ!

必死になって“未経験”をアピールするあたしに、明良はくすりと笑った。

「うん、姉さんがバージンなのは分ってる」

「そ、そう」

なんだ冗談だったのか……本気で言っているように聞こえたから
すごく焦ったよ、おねーちゃんは。

それにしても、バージンだってことモロバレですか、あたし。
もっとも男っ気ゼロですからね、コンチクショー！
どうせ、彼氏いない暦〓年齢だよ！

バレンタイン・クリスマスと恋人同士が盛り上がるイベント時に
外出することなく弟とチョコやケーキ食べたりしてるあたしに彼氏
なんてもんが出来たことないのは、明良もよく分ってるだろう。

こんな状況なのにややふてくされていたあたしは、次に出た明良
の言葉に我が耳を疑った。

「何しろ、姉さんに近づく男全部つぶしてきたからね」

「——は？」

空耳かしら？

「……明良君、今なんと言ったでしょうか？」
おねーちゃんにワンスモアプリーズ。

明良はにつこり私の上で笑う。その顔に浮かぶのは綺麗な、それ
いてどす黒い笑み。

「姉さんに近づこうとした男、俺が全部排除してきたから」

空耳——じゃねえ！

「何ですってえ——！！」

もしかして“彼氏いない暦”年齢”なのは明良のせい！？

「だって俺がいるんだよ？ その俺だって全然意識してもらえないのに、他の男を近づけるわけないじゃないか」

口をあんぐり開けるあたしに明良が楽しそうに説明する。

「姉さんの周りの女の子全部味方に引き入れ済みだよ。その彼女たちから姉さんに近づこうとする男の情報をもらうと、脅して手を引かせたり、そいつのことを好きだという女の子がいたりしたらその彼女をたきつけてたりして、排除してた」

気付かなかった？

そう言われてあたしは呆然と首を振った。

全く気付きませんでしたー！！

あたしの友達全部味方につけていたとか、排除していたとか、マジですか！？

「そんなに数は多くなかったけど、その分本気だったやつもいたからね。手を引かせるのに苦労したよ、特に脅すのは逆効果なタイプは。だけど、自分を好きだっていつてくれる女の子を無碍^{むげ}にもできないでしょ？ そのうちに絆されてその子に気を移してくれたから助かったよ」

「え？ それって、高二の時のクラスメイトの中村君のこと？」

思い当たる節があつてあたしは思わず尋ねていた。

明良が頷く。

「そう剣道部にいた中村なんとかっていうエース」

中村君はあたしの高校二年生の時のクラスメイトだ。

剣道部に所属していて、次期主将になるのがほぼ決定しているエースだった。実際、主将になったハズ。

真面目だけど、気さくでやさしくて、顔もそこそこ——明良ほどじゃないけど——整っていでるので、それなりにモテていたんじゃないだろうか。

そんな彼とは二学期の時に席替えで隣になってからよく話すようになった。休み時間とかけっこうペラペラお互いのこと話していたんじゃないかと思う。

まあ、あたしはブラコンなので大半が明良の話題だったと思うんだけど。同じ学校にいて高一の明良はその時すでに有名人だったから。

あんな弟が一緒なら大変だろうとか、そんな話をしていたと思うんだ。よく覚えてないけど。

その彼はある日、困惑したように『マネージャーから告白された』と言い出した。

その剣道部のマネージャーは一年後輩で——今から考えると明良のクラスメイトだった気がする——かわいくてけなげな女の子で。恋愛感情はないけど、好意は持っているからどうしたもんかと悩んでいる、みたいなことを中村君は言っていた。

あたしはもちろん恋愛経験なんてないからそんな相談されても困るに困って『まんざらでもないなら付き合ってみれば？』なんて無責任なことを言った気がする。

言っておくけど、それは二人きりの時の会話ではなくて、周りにあたしの友達とか彼の友達とかが沢山いた時の会話だよ？

だから、みんなあたしと同じような事を言ってたんだよ？

考えてみれば『特に好きな人がいないから付き合ってあげればいいじゃん！』とあたしの友達たちがやたらと主張していたと思う。明良の手先だったと聞いた今ではあのやけに強力プッシュも頷けるってもんだけど。

とにかくその時は、恋愛感情ないのに……と渋い顔していた中村君だったけど、高三になってそのマネージャーと付き合いだしたらしいのを風の噂に聞いた。その時もすでに彼とはクラスが離れて

しまっていたから直接本人に聞いたわけじゃないのだけど、二人で仲良く下校しているのを目撃したりしたから、ああ本当なんだって思った。

あの一連のことは確かに明良の言っていた排除例に当てはまるのではないだろうか。

——って、それよりも！

「中村君って、あたしに気があったの！？」
今始めて知った！

「……姉さんは気付いてなかったのか。さすが俺のアピールを何年もスルーしてきただけあるね」

「え、あ、明良、笑顔が恐い！　お、弟なんだもん、気付かなくて当然だ！」

「本当の弟じゃないのに」

「今日知ったのに、無茶言うな！」

「だけど、もう知ったよね。ならいいよね」

何を？と問いかける間もなく、明良は手を滑らせあたしのタンクトップ越しの胸の膨らみを撫でた。

「ふぁ！」

くすぐりたい——と同時になんだかお腹の奥がむずむずした。

なにこれ、変！

「わわわ、明良、ストップ！」

「やめない」

言うなりあたしのタンクトップの裾をぐいっと上げる明良。

ひんやりした空気を感じて、あたしの肌が粟立った。

前にも言ったと思うけど、あたしは夜眠るときはブラジャーを着けないで寝る派だ。つまり、下着がわりに身に着けていたタンクト

ツプの下は当然素肌で――。

わああああん、生乳剥き出しだよー！！

「ひゃんっ」

温かい明良の手があたしの左の胸をそつと撫でる。しかも撫でるだけじゃなくて――掴んでますよ。揉んでますよおお！

明良の手の中でふにふにと揉まれて形を変えるあたしの胸。

「柔らかい……」

心なしかうつとりしたようにつぶやく明良。

うわーん、何だかぞわぞわするし、下腹部がズキズキするし、妙な気分だしマジにヤバイ気がするんだけど！

「あああ、明良。あたしは明良は好きだよ？ だけど弟として激しOVEなだけで、こういった関係になる心の準備は全くしてないの！」

ジタバタする。

だけど手も足も押えられてて、全く動くことができない。

「大丈夫。俺は準備万端だから。心も身体もね」

身体の準備……って、アレですか、あたしの腰に当たっているコレですかあー！！

あたしは弟に欲情されている現状にクラクラした。

マズイ！ このままじゃ一線越える！

ようこそ近親相姦へ――だ！ 目くるめく禁断の関係へGOだ！

――そんなのダメだ！ 人として！

「わーん、たとえ本当の姉弟じゃなくても、あたしにとっては明良

は弟なんだってば——！」

必死になってそう叫んだとたんに、明良の動作がピタッと止まった。

「ほえ？」

あたしの胸を掴んだまま動きを止めて、真剣な眼差しであたしを見下ろす明良。

目の奥に浮かぶのは、傷ついたような色だ。

「姉さんが俺を弟だと思ってるのは分ってる。俺を男として見てないのね。……嫌になるくらい分ってるさ」

「明良……」

罪悪感に胸がツキンと痛んだ。

明良はずっとあたしと本当の姉弟じゃないことを知っていた。

それであたしを姉じゃなくて、女として見てて——。

だけど、あたしは覚えてなくて、明良をずっと弟扱いして意識しなかった。

今から思うと、あたしはよく明良に見られていたと思う。視線を感じていたと思う。ふと顔を上げると明良と目が合うという場面がよくあったから。

あの時、明良の目に映るあたしは姉じゃなかったのかもしれない。

「明良、ごめんね……」

あたしは何も知らなかった。ずっとずっと——。

だけど今は真実を知ったから。これからは弟としてじゃなくて、一人の男性として見るようするから。

だから、とりあえず今日はこのままで離してもらって、『誕生日プレゼントはあ・た・し』的なことは後日改めて話し合うことにし

よう。

うん。そうだ、それがいい。

先送りだと言われようが、まずはそこからだ。

あたしは一人納得し、それを明良に告げようと口を開いた――。
だけど、出来なかった。

明良がいきなり笑顔になって、そしてそれがあまりに黒すぎる笑みで。

――喉の奥で言葉が消えた。

「いいんだ。だってこれから姉さんは否応なく俺が“男”だってことを思い知るんだから」

明良はにつこり笑う。背後に黒いオーラを纏って。

「――へ？」

「肉体関係ができれば、俺を弟として見ることは不可能になる。意識しないではいられなくなる。だから、姉さんの身体にまず俺を植えつけるつもりだ」

にく、にく、肉体関係！？

ポカーンとするあたしに明良は続ける。

「だから、姉さんの初めて貰うよ。その次も、そのまた次も。ずっと抱きつづける。その心も俺のものになるまで」

「え？ あ、あ、やあ！」

乳房から離れた明良の手があたしの服を剥いでいく。

片手はあたしの両手を押えたまま、片手ですると。

わわわわわ！ やけに手馴れてるぞ、明良！

絶対童貞じゃないだろう、お前！

いつの間に大人の階段登ってたのか…… おねーちゃんは悲しいぞ。

—— って、それは置いておいて！

今、恐い宣言されたよね！？

あたし思いつきり食われる宣言されたよね！

先に身体いただいちゃう宣言だったよね！？

あ、あ、あ、そ・ん・な・と・こ・ろ・触・る・な！

わーん。わーん！

弟がケダモノになっちゃったよー！ー！ー！！

王子様だった明良を返せ！

「やめっ……ふぐっ、んー、んー！！」

泣き喚くあたしの言葉は明良の口の中に消えていった。

—— 一体どうなる、あたし！？

弟の欲しいもの（後書き）

『誕生日プレゼントはあ・た・し』になっちゃいそう……。

朝の無常（前書き）

短いです。

朝チュン？

朝の無常

衝撃の一夜が明けて、自分のベッドで目を覚ましたあたしは唸っていた。

「うー、うー……痛い」

腰が痛い。

お腹が痛い。

身体のアちこちもギシギシいう。
何より股の間の違和感がすごい。

夢だと（しかも悪夢だと）思ったんだけど、この身体の痛みがそれを現実だと教えている。

昨夜、弟の明良に誕生日プレゼントと称して、押し倒された。
そして——がつつり食われた。

本当に誕生日プレゼントになっちゃったんですよ、おねーちゃん
は！

あたしのファーストキスやセカンドキスは言うに及ばず、あたしの初めても、その次も、そのまた次も！

全部明良が貰っていった……いや、奪われた。

弟だと思っていた男は……はっきり言えばケダモノでした——
！。

手つきやあたしに触れる手は優しくかったけど、容赦なかった。

ええ、もうしつこく、しかもねちつこく責められましたとも。

10年分溜まってるとか何とか言いながら、ビギナーな私の中をこれでもかというほど突いてくれた。本当に容赦なかった。

そんなケダモノさんが、もちろん一回で離してくれるはずもなく

。

破瓜の血や、汗や足の間から流れる誰かさんの体液で身を横たえるのに適さなくなったあたしのベッドから、場所を明良のベッドに変えてまで何度も奪われた。

ようやく解放されたときは朦朧としていて、その後の記憶は途切れ途切れだ。

だけど、いつの間にかシーツが取り替えてあった自分のベッドに戻され、

「おやすみ、姉さん。誕生日プレゼント、ありがとう」

と掛けてきた言葉だけなら爽やかな弟然でありながら、濃厚な、爽やかさの欠片もないキスをかまして上機嫌に自分の部屋に帰っていく明良の姿ははつきり思い出せる。

その直後に疲労やら睡魔やらに襲われて気絶するように夢の世界に入ってしまったけれど。

で、今目覚めたわけですが。

時計を見てびっくりだよ。

寝不足&絶賛疲労中であるにも関わらず、寝過ぎすることなくいつもの時間に目が覚めるあたしって……。

図太い……のか？

おまけに、おまけに。

昨日まで弟だと思っていた男にほぼ無理矢理バージン奪われてしまったというのに、予想されていた悲壮感が自分の中にない。普通、悲嘆に暮れるとか、嫌悪感とか覚えるもんじゃね？

だけど今のあたしの心境は『ああ、ヤッちまったよ……』という羞恥心と困惑だけだ。

いや、いや、麻痺してる可能性もあるけど！

でも、もうちょっと処女失った悲嘆とか、信頼を裏切られた悲壮感とかあるだろうに……。

ある意味自分がすごいよ、そして恐いよ。

やっぱりこれは、あれかな。

夕べの……。

その夕べの一幕が脳裏に浮かんであたしは一気に赤面した。そして明良に怒りを感じない理由を悟った。

確かに始めの方は抵抗していた。どんなに解されても、濡れても痛くて、悲しくてポロポロ泣いていた。

だけど、それ以降は――。

ごめん、神様。正直に言います。

――途中から諦めたというか快樂に負けて流されてしまいました！それを覚えているから、明良に対して怒りを持続できないのだ。たとえ初めは無理矢理だとしても、応えてしまったのは事実だ

から。

「ん？ 待てよ……？」

無理矢理だけど、応じてしまったって……。

え、これって和姦……？

それにその快楽中のどさくさまぎれに、自分の女認定されて応じてしまった記憶がうつすらと――。

「なんてこったい……」

チュンチュンチュンと小鳥がさええる朝の光の中であたしは、男女間における性衝動の無常さを噛み締めていた。

朝の無常（後書き）

食われた……。

中篇だから展開早いです（汗）

爽やかな朝のはずが……

いつまでも無常を噛み締めていても仕方ないので、あたしは朝ごはんを食べるために起き出した。

だけどパジャマから洋服に着替えて——身体中に散ったキスマークは見ないことにして——部屋を出れる姿になったときにはすでに疲労困憊状態でベッドに戻りたくなっていた。

お腹痛ーい。

そして股の間の鈍痛と違和感がものすごい。

何かまだ挟まってる感じするぞ。

背筋を伸ばすのも億劫だし、これ外出できないんじゃない……。

あたしは頭の中で今日予定している授業を思い浮かべた。

幸い、出席を取るような授業はない。

同じ単位を取っている友達から後でノートを見せてもらえば事足りるだろう。

もういいや、今日は休んでしまえ。

あたしはそう決めると、部屋を出て一階に向かった——と言葉にするものすごく簡単だけど、この体調で階段を降りるのってすごい大変だ。

いつもは使わない手すりのお世話になるしかない。
しがみつきながら一段一段ゆっくり降りていく。

かつてこんなに階段が長いと感じたことがあっただろうか。
トントントンと簡単に降りていた昨日までのあたしを返せ！

そんな年寄り状態のあたしがあと数段で一階に着くという時だった。

いきなりリビングの扉が開いて、あたしをこんな体調にした張本人——明良が廊下に出てきたのは。

あたしと明良の目が合った。

……えーと、タベ自分のバージン奪った男相手に、どういう反応を示せばいいのでしょうか。誰か教えてプリーズ。

引きつった笑いを浮かべる？

怒った顔して睨む？

何もなかった顔して挨拶する？

頭の中でぐるんぐるんと考えたけど、結局あたしがそのどの反応も示すことはなかった。

なぜなら、明良が一気にあたしとの距離を縮めて階段下まで来ると、腰と腕を引っつかんで自分の方にぐいつと抱き寄せたからだ。数段分を一気に引き摺り下ろされて、あたしの身体は明良の身体にぶつかった。

びくともしないであたしの身体を受け止める明良。

それには感謝するけど、そもそも何するんだと言いたい。階段にいる人間を引きずり落すことはしてはいけませんよ！

あたしは文句を言おうと思って顔を上げた。が、言葉にはならなかった。

目の前に爽やかな笑顔があったからだ。

「おはよう、姉さん」

なんたる爽やかさ。

清しい秋の朝に相応しい笑顔だ。

いつもの私だったら、ここで『明良ったら今日も朝からイケメンだわね』。その顔だけでお腹一杯だよ。さすがチート君』など思っていたはずだ。

だけど今日は違う。

相手は昨日あたしを誕生日プレゼントと称して食った男だ。

「おはよう、じゃないわい！ この体調の悪さどうしてくれるの！」
私は今度こそ文句を言った。

「だけど、それに対して明良の返答はますます深くなる笑顔で――」。

「初めての姉さんにはキツイ夜だったよね。お詫びに、今日俺も学校休んで姉さんの看病するよ」

さもやさしげに言う明良のその笑顔に、何だか不穏なものをあたしは感じた。

看病？

そんなものされた日にはもっと具合が悪くなる予感がする！

「看病いらない！ あんたは学校行きなさい！」

「そう？ 付っきりで看病しようと思ったのに。もちろん添い寝もして……」

最後の方は何だかフェロモンたっぷりに囁かれた。

掠れ気味で、妙に濡れた感じに聞こえて、その声の調子に夕べのことが脳裏に蘇る。

あたしの背中にぞぞと悪寒が走った。

おまけに密着している腰に何か不穏なものが当たってるのを感じ

て、さらにゾワゾワとした。

……いや、あくまで悪寒！ 悪寒だから！

決して疼きじゃないから！

夕べ酷使されたところがなぜかズキズキと痛んで、何かがじわつと染み出してきたって、それは気のせい！

絶対気のせいだから！

「添い寝なんてしなくていい！」

あたしは身体の妙なる反応と、腰に押し付けられているソレから逃れそうと、明良の胸を手で押した。

意外にも明良はあたしの身体をあっさりと離れた。

そしてくすくす笑いながら言う。

「もつと姉さんを堪能したいけど、時間がないからね。今朝はこれだけで我慢するよ」

「……ふえ？」

あつと思う間もなく屈みこんできた明良に唇を奪われた。触れるだけの、軽いキスだ。

だからすぐに明良は顔を上げたけど、昨日までそんな触れ合うだけのキスすらしたことがないあたしにとっては十分衝撃だった。

「ななななにをするの！」

「何って、朝の挨拶だよ？ 恋人同士なら当然でしょ？」

ひいいい。

いつの間にかポジションが姉弟から恋人になってるよ！

「こ、恋人じゃない！ 姉弟だもん！」

夕べあんな関係になろうが、明良はあたしの弟だ。
今までそう思ってた接してきた時間が長すぎて、いきなり転換は無
理！

「……まだそんなこと言うんだね」

明良が急ににっこり笑った。

だけどその笑みはさっきの爽やかさから一転して、やたらと黒い
というか……。

とにかくいやーな雰囲気背負って、あたしは思わずごくりと息
を飲んだ。

「夕べ、その口で俺のものになるって言ったのに」

なにぃ！？

……いえ、確かにうつすらと俺の女発言されて、応じてしまった
記憶がありますか！

心神耗弱状態だった時のことなんて無効だよねぇ！？

——と言いたかったけど、どうも言うてはいけない雰囲気です。

肯定も否定も出来ずにあうあう言っていると、明良はふっと黒さか
ら甘さを含んだ笑みに切り替えて言った。

「やっぱり何度も教えてあげないとダメだね。姉さんが誰のものか」

糖度も色気もたっぷりな言い方だけど、黒さが滲み出ている台詞
だった。

これってアレだよな？

お前の身体に教え込んでやる的なニュアンスだよな？

夕べのことが走馬灯のように脳裏に蘇ってきて、あたしは青ざめた。

爽やかな朝なのに。朝なのに！

なんでこんな爽やかさの欠片もない会話を……。

泣くぞあたしは。うわーん！

脳内で滂沱の涙を流すあたしに、明良は甘くて黒い笑みを浮かべながらトドメを刺した。

「覚悟して、姉さん。手加減しないから」

……いえ、おねーちゃんは手加減して欲しいです！

爽やかな朝のはずが……（後書き）

弟がどんどん黒くなっていく……。

あたしと座布団

物騒な宣言されて、あたしはそのまま寝室に連れこまれるんじゃないかと危機感を覚えた。

が、さすがに朝だからか、それともこれから学校があるからなのか、明良は意外にもあつさりあたしから手を離れた。

……いや、あつさりでもないか。

人の腰からお尻までひと撫でしてから横を通り過ぎて二階に上がつていったもの！

お前はどこぞのセクハラ親父か！

だけど「うひゃ！」と奇声を上げているうちにセクハラ犯は階段を登っていつてしまったので、結局は文句を言えずじまい。

再び降りてくるのを待つのも馬鹿らしいので、口の中で鬼畜だのケダモノだのエロガキだのセクハラだの悪口を言いながら、あたしは朝ごはんを食べるためにリビングの扉を開けた。

が、台所に立つお母さんの姿を見たたん、すっかり忘れ去っていたことを思い出してあたしの足がギクリと止まった。

そんなあたしの気配に気付いたお母さんは流しの前でくるつとこつちを振り返った。

「おはよう。葵ちゃん。今日の朝ごはんはパンよ。自分でトースターで焼いてね」

「う、うん」

あたしはぎこちなく頷く。

そしておそろおそろ視線を合わせたけど、そこにいるのはいつもの陽気なお母さんで、特に何か気付いた風でもなかった。

あたしがホツとして力を抜くと同時に、そんなあたしの様子を特に気に留めた様子もなく流しの方に振り返って再び洗い物を再開するお母さん。

これは夕べのことには気付いてないとみていいよね？

いくらなんでも能天気なお母さんでも、娘と息子（義理）がアレな関係になったと知ってのほほんとしていられるとは思えない。

戸惑ったり、思わしげになったりするだろう、普通は。

だって、義理だったとはいえ、姉弟として育ててきたんだよ？

あたしの記憶がすっぽり抜けていたって、両親が本当に息子のように思ってた育てていなかったら、いくらなんでも途中でおかしいと気付いていたはずだ。……多分。

だけど、二人ともちつとも明良がもらわれっ子だなんて態度は出さなかった。

だから、顔の作りがあまりに違っていても、あたしは明良が本当の弟じゃないだなんて全然考えもなかったのだ。

それは両親が本当の姉弟して育てようとしてきたからだろう。

そんな二人にあたしたちが……その……一線を越えちゃったなんて知られたくない。

できれば永遠に。

やっぱり、明良を説得して諦めてもらわなければ。

二人を悲しませちゃだめだとその辺りから攻めれば、孝行息子の明良なら納得してくれるだろう。

そして、夕べの記憶を封印して姉弟に戻るんだ！

あたしは密かに決意すると、のろのろとテーブルに移動した。

そしてパンを一枚取り出すと、テーブルの上のトースターに放りこんでスイッチオン。

明良のせいであまり食欲はないけど一枚くらいなら食べられるだろう。

そこまで考えて、まだ学校を休むことをお母さんに伝えてないことを思い出した。

あたしはごくりと息を飲んで、口を開いた。

「お、お母さん、あたし今日は具合悪いから、大学休むね」

言葉がつかえたのは、どうして具合悪いとか、どこが悪いのか聞かれると身構えたためだ。

だけど、あたしが一大決心して言ったにもかかわらず、振り返りもしないでお母さんは、

「分ったわ。お母さん、午後からパートに行くから、留守番頼むわね」

などと明るく言う。

身構えていたあたしはホッとして力を抜いた。

そのお母さんの言葉も態度も、昨日ことに気付いてるようには見えなかったからだ。

うん。きつとお父さんもお母さんも夕べは熟睡していたんだ。

だから二階で繰り広げられているギシギシアンアンな音には気付かなかつたに違いない。

あたしはそう思うことにした。

——名誉の為に言うておくけど、あたしだって声を抑えようとしていたんですよ？

信じられないくらい甘い甲高い声が自分の口から洩れるのに驚いて、そして階下に響くことを恐れて、自分の口を手で塞いでいたのだ。

だけど！

『声、聞かせて？ 姉さんが俺の腕の中で啼くの、聞きたいんだ…』

とか何とかほざく明良があたしの手を外させ、ベッドに縫い付けて、人が感じるところばかり責めてくるんですよ！

本当になんなの、あのしつこさは！

おねーちゃん、おかげで喘ぎっぱなし、啼きっぱなしですよ！
喉カラカラになったよ！

それで途中、口移しで水を飲まされたりしたよ！

『もっと欲しい？』

『……う、ん……欲し、い……』

『いいよ。もっとあげる。姉さんが欲しいだけ』

『……明良……欲しいよう……』

とか何とか意味深な会話も交わしましたとも！

ちなみに、上の会話は水のことだから！

水が欲しいって言うてるだけだから！ そのトコよろしく！

そんなこんなで明良のいいようにされ、途中から朦朧として声を抑えることなど思考の彼方で。

ずいぶん声を出したな、という自覚はある。

だけど、幸いにも聞こえなかったらしい。

ああ、よかった！

不幸中の幸いだ！

ホッとしたあたしは、マグカップにカップスプーンの素とお湯を入れてかきませながら、椅子に着席しようとした。

が、ダイニングテーブルのあたしの席に鎮座しているものが目に入ったとたん、椅子を引いたままの姿勢であたしは硬直した。

あたしの座る椅子の座面に鎮座していたもの——それはドーナツ型のクッション。

青いワッフル生地に包まれたソレには、見覚えがあった。

半年ほど前に、近所のインテリアショップのセールでお母さんが買ってきたブツだ。

ちなみに、我が家には痔の人間はいない。

お母さんがあたしを妊娠中に軽く痔になったくらいで、今は完治しているハズだ。

だけど、いつか再発するかもしれないし？などと言って、使いもしないそれを買ってきたのだ。安かったからという理由で。

もちろん使う人もいなくて、結局和室の押入れの中に買ってきただけのまま放置されていた。

それが、どうして今あたしの椅子に置かれているんだろうか……？

あたしはダラダラと固まったまま冷や汗を流した。

これは、何？

どうして、よりによって今朝、こんな所におかれているんだろうか。

あたし痔じゃないよ？

そりゃ、それに近い場所が今現在痛みを訴えてますけどネ

あたしは青いドーナツ型クッションを凝視した。

幻であって欲しかったけど、何度瞬きしてもそこに鎮座している。

——うん。

確かにこれなら座った時に調節すれば、痛む箇所が圧迫されるのを防いでくれるかもしれないですね。

いたわりすら感じられる……ほんの少しだけだけど。（大部分は困惑だ）

問題は——誰が何のためにここにこれを置いたのか、だ！

明良？

……それでも、どうしてそのことにお母さんは何も言わないの？
突っ込まないの？

誰か答えてプリーズ！

あたしはグクシャクと片手に持っていたマグカップをテーブルの上に置いた。

手に持っていたそれを落さなかったのは、ある意味奇跡だった。
だけどこれからも無事で持っていられるか自信はない。

これの——ドーナツ型クッションが置かれている意味を考えると。

背中と顔にイヤンな汗が流れた。

これは尋ねるべきなのだろうか。真相を明らかにするべきなのだろうか。

……こんなに嫌な予感がするのにな？

だけど聞きたくても聞けない。

だって——

『葵ちゃん、初めてだったから辛いでしょ？　せめて直接当たらないようにそのクッション置いておいてあげたわね。これ買って置いてよかったわね、役に立ったでしょう？』

なあんて言われたら、あたしは羞恥心で死ねる！
いますぐ死ねる！

それにお母さんだった場合——つまり、夕べのことがモロバレしてるってことじゃないか！

お母さんだけじゃなく、間違いなくお父さんにまで！

いやあああ！

知りたくない！ そんな事実！

もう、こなったらアレだ。

聞かなかった、見なかったことにしよう。

うん。そうだ。

なかったことにするんだ。あたしの精神衛生の為に！

あたしは事なかれ主義を大いに発揮すると、ギクシャクした身体を動かしてドーナツ型クッションの上にそつと腰を降ろした。

ハハハ。痛いことには変わりありませんネ

あたしが椅子に座るのを待っていたかのように、トースターがチンと鳴って焼き上がりを伝えた。

あたしは手を延ばしてこんがり焼けたパンを取り出したものの、多少なりともあった食欲はすっかり無くなっていた。

あたしと座布団（後書き）

ギシギシアンの音は多分階下に響いていたんじゃないでしょうか（笑）

因縁フラグは立たない(前書き)

更新遅くなってすみません。

因縁フラグは立たない

殆ど無理矢理にトーストをお腹の中に詰め込んで、あたしはよたよたと自分の部屋に戻った。

途中の明良の部屋からは何の気配もしなかったので、どうやらあたしがキッチンにいる間に家を出たらしい。

少なくとも夕方までは顔を合わせる必要がないのがわかってホッとした。

だけどベッドに潜り込みながら、そんな自分に気付いてあたしはため息をついた。

世界が変わってしまった。

昨日までのあたしの世界は大学に言って、授業を受けて、友達とおしゃべりをして。

家に帰ったら、明良おとつとにべったり張りついて甘えて愚痴を聞いてもらったり、テレビ見て論戦をしたり。

そんな普通の平穏な世界だったのに。

今のあたしは明良が嫌い。

あたしを手に入れるという彼が。

自分の抵抗をやすやすと封じる男が。

目を閉じると思い出すのは、自分に覆いかぶさってくる明良の姿。それは見慣れた弟じゃなくて、見知らぬ男のようだった。

自分を弟としてじゃなくて、男として意識させようとしているなら、十分効果あったよ！

だけど、もうちょっとソフトなやり方をして欲しかったよ、おねーちゃんは。

いきなりアレってどうなの？

いやいやいや、今はそれを考えてはいけない。

あたしは目を閉じると浮かんでくる、あの情欲を宿した明良の熱っぽい目を頭を振って追い払った。

とにかく今は寝不足を解消して、身体癒して体力つけないと。抵抗すらできずにいいようにされてしまう。

「……あ」

だけど不意にとあることを思い出して、あたしはむくつと起き出した。

そうだ。眠ってしまう前に、友達の澄香に大学を休むって連絡しておかないといけない。

夕べから机の上に置きっぱなしだった携帯電話を手にとって、あたしは澄香宛てにメールを打った。

『ごめん。今日、具合が悪いので大学休むね。』

それで申し訳ないんだけど、今日の分の講義のノート、後で見せてもらっていい？』

通話ではなくてメールにしたのは、今頃澄香が電車に乗っている時間だから。

彼女もあたしと同様に親元から大学に通っているけど、少々遠くて電車で揺られている時間が長いのだ。

ベッドに携帯を持ち込んで返信を待っていると、やがて光と音が

メールの着信を伝えた。

『具合大丈夫？ レポート作成で根でも詰めたか？
とりかえずノートはちゃんと取っておいてあげるから、ゆっくり
休みなさいな』

『ありがとう、よろしくね』

あたしはそう返信して、携帯を畳むと、ふうつと息を吐いた。
これで大学のことは心配いらずに休むことができる。

相変わらず痛む腰とお腹をさすりながらベッドに戻ると、あたし
は今度こそ目を閉じた。

いえね、簡単に眠れるわけがないと思っただけですよ。
だって、ここ現場だし？

タベ弟の仮面をつけた野獣に襲われた場所でしょう？
目を閉じればその時のもろもろのことが脳裏に浮かぶんじゃない、眠
れるわけがない。

あたしはそう思って、対処策として羊を数えることにしたのだ。
羊が柵を飛び越えて牧場に入っていく光景を脳裏に思い浮かべつ
つ、「羊が一匹」とか考えていたわけ。

ところが、ちょうど十匹目のメリーさんが柵をぴょんと飛び越え
て、草が覆い茂った牧場に着地をしたあたりであたしの意識がフエ
ードアウトした。

あまりの展開に「早くね？」と自分でツツコミ入れたのが最後の思考で――。

ぐう。

と、あたしはそのまま夢の中へ。

いや、実際は夢は見なかったと思う。

文字通り爆睡して、フェードアウトして気付いたら時間が経って
いたって感じ。

で、目が覚めた原因なのですが。

息苦しさですよ！

何かに口を塞がれて、息苦しさのあまりに意識が浮上したらしい。
カッと目を開けてみたら――目の前に綺麗な綺麗な顔が至近
距離で――。

びっくりして声が出た。

「ふおっ！」

が、出てきたのは変な音。

なぜなら――口が塞がれていたから。

口を塞がれているだけじゃない。何か口の中に入ってる。――そ
う舌が。

唾内を這い回る生暖かい舌と、唾液を囁られる音で一気に覚醒し
た。

もちろん、そんなことをしている犯人はヤツしかいない。

「んー！ んー！」

あたしは自分に覆いかぶさっている明良の背中をバシバシ叩いた。

苦しい、ギブギブ！

そんなあたしの息苦しさに気付いたのか、明良がつと顔を上げた。

うん。銀色の細い線があたしと明良の唇を繋いでいるように見えるのは気のせいだ。

そして、それを明良が艶かしい仕草で舌で舐め取っているのも、絶対気のせい、気のせい。

あたしはすっかり腫れぼったくなった唇を動かして言った。

「な、なにしてんの！？」

明良はにっこり笑った。

「ただいまのキスだけど？」

「一体いつからうちにはキスで送り迎えする外国人的な習慣になった……って、ただいま？ え、夕方？」

学校に行った明良が帰ってくるのは夕方ははずだ。

あたしは視界いっぱいになった明良を押しつけて、周囲を見回した。

部屋の中は薄暗くなっているのに気付き、窓の方に目をやれば――
すっかり黄昏時だった。

いつのまにか時間経ってる！

え、あたし今までずっと眠っていたってわけ？

「お昼食べ損ねた！？」

「母さんが言ってたよ、姉さんは一度も起きてこなかったって」「起こしてくればよかったのに！」

「酷使されて疲れているんだろうから、起こさなかったんだって」
「……ん？」

今何か変な事言わなかったか？

聞き返そうとしたあたしは、ベッドに横になっているあたしに覆いかぶさったままの明良が、ふっと妖しげな笑みを浮かべるのに気付いて言葉を忘れた。

「姉さん。そんなに疲れていたんだね。ごめんね」

「……………」

「ごめんね、と言いつつ、なぜそんなに嬉しそうなのでしょうか、明良君……」。

「ずっと我慢してたから、ついタガが外れてしまつて。初めての姉さんにはキツかったね」

「……………つつ」

あたしは息を飲んだ。

明良の手が毛布の上からあたしの腰あたりをゆっくり円を描くように撫でたからだ。

「でもごめんね。これからもあまり手加減してあげられそうにないや」

だからどうして、ごめんと言いつつ、嬉しそうに笑うんでしょうか、明良君！

あたしは腰を撫でる明良の手を払って叫んだ。

「こ、これからなんてない！二度とやらない！」

だけど明良の笑みは変わらなかった。

「それは姉さんの意見でしょう？俺の意見は違つし、もう言ったよね？姉さんが誰のものか何度でも教えてあげるって」

「い、いらない！そんなのいらない！平穏な生活プリーズ！」

「弟から恋人にシフトするだけで、今までと同じに平穩だよ？」
「嘘つけ！ チート君を恋人にして平穩な生活できるわけないですよ！」

フラグが立ちまくるのが目に見えてるよ！

明良の親衛隊（非公式）に因縁つけられたりする、お約束のフラグが！

幸いなことに高校は卒業しているから、裏庭や屋上に呼び出されるフラグだけは立たないだろうけどさ。

「大丈夫、今までと同じように姉さんに手出しなんてさせないから」
にっこり笑う明良。

「い、今まで……？」

そういえば、たまに睨まれたり影でコソコソ言われたりするけど、漫画や小説にあるような因縁フラグはまったく立ったことは無かった気がする。

それは姉弟だからだと思っていただけ……もしかして影で明良が何かやっていたのだろうか？

……あり得る。あり得るよ！

だって、あたしに近づく男を知らぬ間に抹殺していたくらいだもの！

この強烈なカリスマ性で、あたしに対する風当たりを無風にするこことくらい朝飯前に違いない。

我が弟がすごいかというか、なんと言つか……。

あ、いや、本当は弟じゃなかったつけ。

「というわけで、姉さん……」

かすれた声と共に、唇が降って来た。
「ふぐつ!？」

油断していたあたしは再び口の中に潜りこんできた舌に囚われて、
再び翻弄された。

「んー、んー!」

そういえば今更だけど。 本当に今更だけど!

これって、これって、ベッドに横たわる羊な自分に、覆いかぶさ
ってくる狼な明良って図式じゃないでしょうか!

ヤバイ!

—— 本能が危険信号を発した。

因縁フラグは立たない(後書き)

明良暴走中でいつまで経っても話が進みません……。

あたしとお赤飯（前書き）

前半はR15。

あたしとお赤飯

「姉さん……」

掠れた声と熱い吐息が耳に吹き込まれて、あたしは全身の毛がぶわつと逆立つのを感じた。

肌蹴られたパジャマの前身ごろに忍び込んだ明良の手があたしの胸の膨らみを掴み、官能を引き出すように揉み上げる。時々引っかけするように指で先端の尖ったものを弾かれて、びりりと電流が走った。ビクンと身体が反応する。

「ん、んんっ」

「感じている姉さん、可愛い」

耳朶を食まれながらつぶやかれ、あたしはぶるつと震えた。

ここに至るまではあつという間だった。いや、もう、電光石火というやつ？

あたしの本能の危険信号は遅すぎたようだ。

だって、ディープキスされて、酸素不足とその他もろもろのせいでボケーンとしている間に、パジャマのボタンを外されて。

気付いたら生乳掴まれて揉まれてたし。

人の口を攻めるのをやめた明良は今度は耳を攻撃目標にしたらしく、歯を立てたり舐めたりしてる。

耳が性感帯って話はどうやら本当だったみたい。不本意ながら自分の身体で体験中だ。

息を吹き掛けられたりするだけで全身に震えが走る。それに、音。

明良の舌が奏でるくちゅという水音と濡れた感触が触覚と聴覚を通して脳が直接犯されているような錯覚を覚えてしまう。

ぞわぞわぞわと悪寒にも似た震えが走って、そのたびに力が抜けていくのを感じた。

耳を犯されて、胸を愛撫されて。

昨日明良を受け入れて痛みを訴えた部分が、じんわりと熱くなるのを感じて。

それがまた羞恥心をあたしに与える。なのに恥ずかしいと思った傍からその思考が快楽に溶けていくのだ。

耳に舌が差し込まれてグチュグユという音すら脳に直接響いて――

「姉さん。姉さん」

熱い吐息とともに明良の声があたしを犯していく。

「姉さん、俺のものだ。心も身体も、未来も、全部。姉さんの何もかもが。……葵。俺の恋人、俺の最愛の女。ねえ、言って？」

ドロリと熱く濡れたような言葉が吐息と共に耳に注ぎ込まれる。

「タベのように、その口から聞きたい。姉さんは誰のもの？俺のものだよな？俺の女になるってその口で誓ったよね？さあ、また誓って？」

明良のこの声に、あたしの脳裏でタベのことがフラッシュバックした。

後ろから責められながら、あたしの耳元になっとりとした声で流し込まれた甘美な毒を。

タベと今との境界線が消えうせ、促す明良の声だけがあたしを支配する。

「さあ、姉さん」

目の前がくらくらしらしながら、あたしは口を開いた。
「あ、あたしは」

あたしは何だろう。

明良の姉？ それとも――？

「あたしは、明良の――」

――陥落寸前だった……と思う。

その時、

「葵ちゃん、明良ちゃん。お父さん帰ってきたから、ご飯にしまし
ようね」

と階下からお母さんが呼ぶ声が聞こえなければ。

あたしはハッと言葉を飲んだ。

明良も一瞬身体を硬直させると、甘噛みしていたあたしの耳朶か
ら口を離して苦笑した。

「残念。時間切れだ」

パジャマの合わせ目から差し入っていた手を離し、残念そうに言
うと、あたしの上から身体をどける。

あたしは動悸息切れ眩暈を同時に覚えて、ベッドの上で仰向けに
なっただけで呆然としていた。

あ、あたし、今何を言おうとしていたのさ――！？
自分は明良の何だと……？

……ヤバイ。ヤバイよ、あたし！

今、今、身体じゃなくて、心が堕ちそうだったよ！？

動揺するあたしをよそに、明良は余裕の笑みを浮かべると、あたしに唇に指を滑らせて言った。

「姉さん、この続きはまた今度ね」

今度なんて、あるか――！

……とあたしがその言葉に心の中で反論できたのは、明良が上機嫌であたしの部屋を出て行った後のことだった。

「今のは気のせい。気の迷い。起き抜けだったから油断したの」

あたしはベッドから立ち上がり、パジャマのボタンをはめながらブツブツつぶやいた。

「明良は弟。あれは弟。血が繋がらなくても弟。あたしは明良のお姉さん。姉弟なの」

明良は弟。

決して決して恋人なんかじゃないし、ましてやあたしは明良の彼女なんかじゃない。

あたしはそう自分に言い聞かせる。

心の片隅で『本当の姉弟じゃないならかまわないんじゃない？』なんて小さな声が聞こえちゃったりするけど、それは気のせいだ。うん。

だって、姉弟と思って過ごした日々の方が断然長いのに、そう簡単に切り替えることはできない。

あ、血が繋がってなかったの？　ならこういう関係になっても全然OKね！——なんて単純に思えるわけがないのだ。

それほど姉弟として育った年月は重い。

「明良は弟、弟」

あたしは呪文のようにそう唱えると、夕飯を取るべく階段を降りていった。

明良はあたしより先に下に降りていたようで、リビングの扉をあけると椅子の位置関係から真っ先にヤツの姿が目に入った。

テーブルの定位置に座って、リビングに入っていくあたしを見て意味ありげに笑みを浮かべる。

あたしがムツと睨みつけると、更に腹立たしいことに笑みが深くなった。

まったく何がおかしいやら！

ブンブン怒りながらテーブルを回り込んで自分の椅子の所まで——残念ながら明良の隣だ——に移動したあたしは、テーブルの上に置かれたいつもより豪華なメニューに目を見張った。

だけどイチゴのショートケーキが人数分お皿に乗っているのを見て、誕生日のメニューだと理解する。

テーブルに置かれているのは、ケーキの他にツナサラダとマカロニサラダの二種類の野菜系メニューに、お皿に山盛りになった唐揚げとポテトフライ。それに玉ねぎとコーンのコンソメスープ。

そして——ご飯茶碗によそられたお赤飯。

美味しそう、とお昼を食べ損ねたあたしが隣の強姦魔のことを一瞬忘れて食い気に走りかけたときだった。あたしがその意味することに疑問を持ったのは。

あたしは椅子を引いた状態で硬直した。

……なぜここにお赤飯が……？

唐揚げがローストチキンレッグだったり、サラダの種類が違ったり、ケーキがチーズケーキだったりモンブランだったりすることはない、今まで我が家の誕生日の夕飯メニューにお赤飯があったことはない、と思う。

だけど今日のこの日に限ってお赤飯があるのは一体……？

いや、いや、お祝い事にお赤飯は付き物だよ？

誕生日にお赤飯を炊くうちだっていっぱいあると思うよ？

……でもね？

今まで出てきたことないのに突然のお出ましじゃ不自然だと思わない？

あたしはぐくりと唾を飲んだ。

引いたままの椅子には相変わらずドーナツ型のクッションが敷いてあったりするの、また何やら疑惑に拍車をかける。

穿った見方をしすぎだろうか……。

「あら、葵ちゃん座らないの？」

取り分け皿を手にしたお母さんが、テーブルにやってくる。あたしは嫌な予感を感じながらも聞かずにはいられなかった。

「お、お母さん、どうして今日お赤飯なの？」

「お祝いごとだからに決まってるじゃない」

お母さんは朗らかに笑う。

「で、でもさ、今まで誕生日にお赤飯出たことないような気が……」

「だって、今日は特別なもの。十八歳っていえば大人の第一歩だしね」

……私の十八歳の誕生日にお赤飯が出た記憶はないのですが……。

「お母さんとしてはあなた達が大人の階段の第一歩を登り始めたのを寂しく思う気持はあるけど、これはやっぱりお祝いしないと思っってお赤飯なの」

と言ってにっこり笑うお母さん。

あたしは硬直したまま、お母さんの顔を凝視した。

あなた達が大人の階段の第一歩って……何を指してますか、お母さん？

あたしが隣の野獣に強制的に大人の第一歩を踏み出させられちゃったことですか？

さよならバージン、おいでませ（精神的）近親相姦の世界にインしちゃったこと？

……あああ、答え聞きたくねえ！

「そう、十八歳っていえば結婚もできる歳だしね、姉さん」

明良がにっこり笑って口を挟む。

突発的に隣のヤツの首を絞めなくなったあたしを誰も責められまい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6487s/>

弟とあたしの攻防戦

2011年7月21日23時34分発行